



研究論文 (Articles)

親や友人，同性や異性との対人的な問題と 自己分化の関連¹⁾

中 島 隆太郎

(明治学院大学心理学部)

Relationship between Differentiation of Self and Interpersonal Problems with Same-sex or Opposite-sex Parent or Friend

NAKAJIMA Ryutaro

(Faculty of Psychology, Meijigakuin University)

The concept of differentiation of self, proposed by Bowen, a transgenerational family therapist, derives from an integrative perspective that considers intrapsychic dimensions and interpersonal distance. Differentiation of self includes four dimensions: lack of “emotional reactivity”, “emotional cutoff”, “fusion with others”, and presence of an “I-position”. This study examined relationships between interpersonal problems and differentiation of self among 322 participants aged 18–26 years who responded to hypothetical scenarios involving same-sex and opposite-sex parents and same-sex and opposite-sex friends. We found negative correlations between the presence of an “I-position” and “domineering/controlling” interpersonal problems and between lack of “fusion with others” and “domineering/controlling” interpersonal problems. The latter association was significantly stronger for the opposite-sex parent than the opposite-sex friend. A mature sense of autonomy is thought to arise from feeling respected as an autonomous individual. In the absence of such respect, the relationship between parent and child may be undifferentiated, leading to communication patterns characterized by struggles for dominance and control.

自己分化とは、多世代派家族療法家の Bowen, M. によって提唱された概念で、個人の心理内界的な側面と対人的な距離感を含む統合的な視座に由来する。また、自己分化には4つの側面，“情緒的反応”，“情緒的遮断”，“他者との融合”の防止と，“アイ・ポジション”の維持が存在する。本研究は、自己分化と対人的な問題の関連において、問題を抱える相手が異なると差がみられるのか検証することを目的とする。方法は質問紙法を採択し、18～26歳の男女322名から回答を得られた。なお、対人的な問題は問題を抱える相手として「自身の父親」「自身の母親」「男性の友人」「女性の友人」をそれぞれ思い浮かべて回答を求めた。結果、明確な自己信念に関する自己分化と「横柄で支配的」な対人的な問題、「他者との融合」的關係を防ぐ自己分化と「横柄で支配的」な対人的な問題の相関係数において、有意に異性の親のほうが異性の友人よりも負の相関が強いことが分かった。自己信念を軸として自律性を成熟させるには家庭環境で本人の自律性を尊重されることが重要であるとされてきた。これに問題がある場合、親子間の距離が密着しており、支配的な関りが展開されていると考えられる。

Key Words : Differentiation of self, Interpersonal problem, Relationship, Comparison of correlation coefficients, Integrative approach

キーワード：自己分化，対人的な問題，間柄，相関係数の比較，統合的アプローチ

1) 本研究は、東京大学大学院教育学研究科に提出する博士論文の一部を構成する予定である

問題・目的

対人的な問題と心理療法の統合

近年、児童虐待やひきこもり、DV、家庭内暴力、いじめ等の対人関係にまつわる問題が連日取りざたされ、社会問題へと発展して久しい（中島（2019）を一部修正）。このような対人的な問題にアプローチする際には関係性はもとより、それが各々の持つ特性とどのように関連しているのか、関係と個を鑑みる統合的な視点が重要となる。心理臨床において、とりわけ対人的な問題における多面性を統合的に扱うことの重要性はFeldman（1979）をはじめとして兼ねてから主張されており、より人の生に沿った効果的な臨床実践の達成として関係と個の統合が推進されてきた（例えば平木・野末, 2000；中釜, 2010；Wachtel, 1997）。臨床事例が持つ多元的な側面を統合的に扱うこのような試みは、現代的な心理臨床の課題として取り扱われてきた。このような課題に対して下山（2000）は、単に折衷的な寄せ集めをすることでそれぞれの次元が矛盾をきたして機能しなくなるのではなく、「有機的な統合体として現実の全体性を視野に入れることが求められよう」と述べている。このように、事例の持つ様々な位相を統合していく試みは心理療法において主たる現代的課題として取り上げられ続けている。単一の理論学派に依拠するのではなく、より効果的な在り方を求めて他学派や他領域の有機的に組み合わせるのも、また中釜（2010）が述べるように、オープンな交流をもって支援のプロセスで様々な視点を取り入れるのも統合の姿である。事実、米国と本国では多くの臨床家が自身を単一の学派ではなく、折衷的・統合的であると語ることが言われており（金沢・岩壁, 2006；Norcross, 2005）、その精緻化にはまだ課題はあるものの、あって然るべき心理臨床の流れだと言える。

対人的な問題を抱える相手との間柄を取り扱う重要性

健康な対人関係を構築・維持する上で、ソーシャルスキルをはじめとする個人の特性の向上が、心理面接や心理教育プログラム等で目指されてきた。しかし、対人的な問題は各々に特性を持つ個人と個人の相互作用によって構成されるものであり、相手の

特性もまた重要な規定因となることは想像に難くない。そのため、個人が抱える対人的な問題にアプローチする際には、本人の対人的能力にのみ依拠して判断するのではなく、相手が誰なのかによってその能力が十分に発揮しうるかを配慮することも求められる。つまり、個人の対人的な能力を測定してアセスメントするだけでは本人が抱える対人的な問題へのアプローチは困難であり、関係性そのものや相手の特徴という個人の外側にも配慮に値する要素が存在する、つまり問題に対する文脈的要素への言及もまた重要となる。このうち問題を抱える相手に関する議論では、家族と家族以外では感情（情動）のあり方が異なり、対家族の方が感情の絡み合いが強く反応し易いとされている（Bowen, 1978；Kerr & Bowen, 1988 藤縄・福山 監訳 2001）。心理療法の一流派である多世代派家族療法では、情動のあり方をめぐって同様の議論を繰り返してきた。また、本研究の主たる探求対象であり、対人的距離感に関する統合的な概念である自己分化の測定尺度には、どの重要他者に関する内容か下位尺度が分かれている物もあり、両親と友人および恋人を別の下位尺度として設定している（例えばBray, Williamson, & Malone, 1984；平木・岸・野末・安藤, 1998）。このように考えると、自己分化と対人的な問題のつながりを考える際に、その媒介変数として相手との間柄や相手の特徴を鑑みる必要があると言える（自己分化と多世代派家族療法については後述する）。しかし、自己分化について対人的な問題を抱える相手との間柄でその在り方が異なるかを検証した研究はみられない。

関係性と個を統合的に理解する視座としての自己分化

このように、対人的な問題へのアプローチには、関係性を扱うと同時に問題を抱える個人の特性を鑑みることと、問題を抱える場面における相手がどのような人間なのかを配慮する必要がある。その中でも前者の、関係性と個を統合的に理解する視座として自己分化（differentiation of self）（Bowen, 1978；Kerr & Bowen, 1988）という概念が挙げられる。

自己分化は、心理療法の一流派である家族療法の中でも多世代派と呼ばれる流派から生まれた概念

で、その提唱者である精神科医のボーエン（Bowen, M.）は多世代派家族療法のパイオニアの一人である。家族療法では心理支援の場で目の前の個人だけに着目するのではなく、家族をはじめとする個人を取り巻く様々な関係を積極的に取り組み、発展してきた。その中でも多世代派家族療法は家族に対して世代を遡って接近し、脈々と展開する病理のパターンを探求しながら、とりわけ関係と個人における情動のあり方に着目してきた。個の尊重が成されない自他の境界があいまいな関係、例えば母子密着やDV、虐待などに代表される葛藤的な関係は情動的な絡み合いが強く引き起こるとされる。関係におけるこのような情動のあり方は、情動と思考をバランスよく機能させる個人の能力と関連することが指摘されている。つまり、思考が情動に飲み込まれることなくコントロールできる能力が高い個人は、情動的に安定した関係を構築する能力が高いとされている（Bowen, 1978；Kerr & Bowen, 1988）。そして、これらの能力は世代伝達過程（intergenerational transmission process）をもって親から子に伝達されるとされ、親子という関係から子という個人に寄与される。これらの情動や関係性について、個人間と個人内を統合的に論じたのが自己分化という概念である。

自己分化は、成熟した発達における最も重要な人格の変数、情緒的な健康の実現（Skowron & Friedlander, 1998）とされ、健康的な家族機能の実現と密接に関連する（中島, 2019；Skowron, 2005）。個人内の機能は前述した情動と思考のバランスにまつわる能力を指し、個人間の機能は互いの個を尊重しつつ精神的なつながりを持つような、対人的な距離感のバランスを保つ能力を指す。個人内と個人間の機能は相互に関連し、これらが低い場合、①情緒的に反応し易くなりエネルギーの放出が強い感情の表出に向かう。また他者の情緒的側面に対しても反応し、冷静でいられない。②明確な自己の感覚を維持できず、周囲の圧力を受けてしまい、自分で感じたままに行動することが難しい。③とても親密な関係において他者に巻き込まれたり融合したりする。④対人相互作用が激しく、情緒的に遮断するような反応になる、と Peleg-Popko（2002）はまとめている。自己分化とは対人関係の距離感に対して個人の心理内界を含

めた統合的視座を持つ概念であり、自己分化が持つ最大の現代的意義がそこにある（中島, 2019）。さらに中釜（2010）は、相互に親密な関係という個人間的な事象だけではなく、その複数人の心理内界と同時に繋がる概念であり、ボーエンが無理なく個人心理療法と家族療法を橋渡しする工夫として自己分化があったのではないかと述べている。

主たる先行研究と目的

自己分化と対人関係の関連は、夫婦関係満足度との正の関連（Skowron, 2000）をはじめとしてこれまで先行研究で検証されてきた。その中で対人関係の問題的側面に対して総合的に言及し、自己分化との関連を検証した先行研究に Skowron, Stanley & Shapiro（2008）が挙げられる。本先行研究では、18歳から22歳の大学生132名を対象に質問紙調査が縦断的に実施されている。質問紙には自己分化を測定する Differentiation of Self Inventory（Skowron & Friedlander, 1998）、対人的な問題を測定する Inventory of Interpersonal Problem（Horowitz, Alden, Wiggins, & Pincus, 2000）が含まれている。初回の配布から12週間後に再度同様の調査を同じ集団に実施しており、対人的、精神的健康面に対する自己分化の寄与を検証している。階層的重回帰分析では2回目に測定した対人的な問題を目的変数にした場合、1回目の対人的な問題と正の相関を、1回目の自己分化と負の相関を示した。

しかし、Inventory of Interpersonal Problemsの教示文では誰を想定して回答するのかが具体化されていないため、相手の影響に言及するには対象を特定した上で回答を求める必要がある。さらに、本先行研究が実施された米国と本国では対人関係に対する意識の差が多く議論されており、前者が個人主義、後者が集団主義という言葉でしばしば表現されてきた。よって本先行研究の知見を本国にそのまま適用することは一考の余地がある。

本研究では Skowron, Stanley & Shapiro（2008）から自己分化と対人的な問題の関連に着目して調査を実施する。対人的な問題については Inventory of Interpersonal Problems の理論的背景である Wiggins（1979）や Wiggins, Trapnell & Phillips（1988）の円

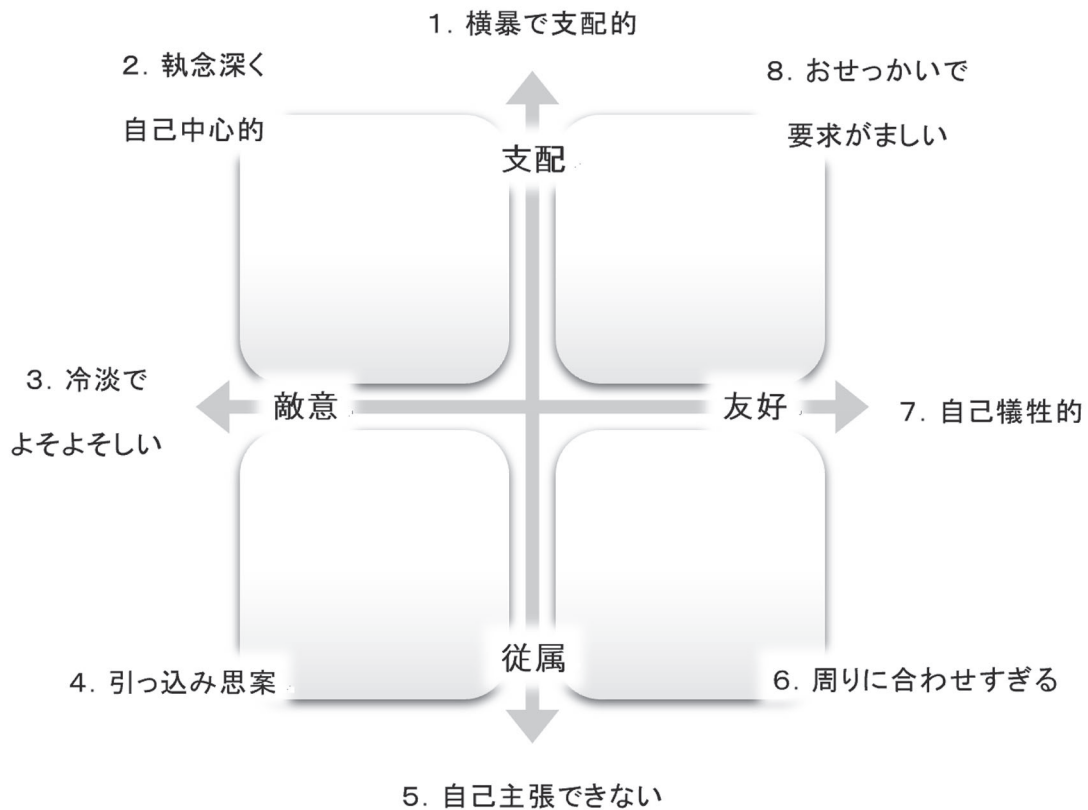


Figure 1 円環モデル (Wiggins, 1979; Wiggins, Trapnell & Phillips, 1988)
(鈴木・藤山 (2011) を改変)

環モデル (Figure 1) をその定義とし、対人的な問題の全体像を捉える。その中でも今回は対人的な問題を抱える相手との間柄による、自己分化と対人的な問題の関連の差に着目する。

これに関して、問題を抱える相手の間柄による差を検証した先行研究が見られないことから、本研究ではまず広い枠組みで間柄を捉えたい。自己分化は世代間での関連性が重要視されることから、親と、家族外で比較的多く関わる機会が多い重要他者である友人との差を間柄を捉える観点とし、さらに一般的に議論に掲げられやすい視点として性別についても触れることにする。これにより、Inventory of Interpersonal Problems では自身の父親、母親、男性の友人、女性の友人のいずれかとの間の関係性について解答するように教示する。以上の手続きをもって、自己分化と対人的な問題の関連が、問題を抱える相手との間柄によって差があるのかを検証する。

方法

本研究と関連の強い先行研究 (Skowron, Stanley & Shapiro, 2008) に倣い、大学生を対象に質問紙調査を行った。首都圏内の国立大学1校、私立大学2校、専門学校2校の授業時間に実施した。所要時間は15分程度であった。

調査協力者

18～26歳 ($M=19.92$, $SD=1.25$) の322名 (男性: 99名, 女性: 222名, その他: 1名) に実施した。このうちの320名が学生であり、うち1名が専門職であった。今回は、同性と異性の観点から分析するため、便宜的に性別欄で男性もしくは女性と回答した321名を分析の対象とする。

質問紙の構成

本研究で使用した質問紙はフェイスシート、日本語版自己分化測定尺度 (以下、DSI-R) (中島, 2019; Skowron & Schmitt, 2003)、対人関係目録日本語版

（以下、IIP-64）（鈴木・藤山，2011；Horowitz, et al, 2000）で構成されている。以下にDSI-RとIIP-64について詳細を述べる。

① DSI-R（中島，2019；Skowron & Schmitt, 2003）

自己分化の測定に用いられた。Skowron & Friedlander（1998）が作成した現法をSkowron & Schmitt（2003）が改良し、その日本語版にあたる。中島（2011）と中島（2019）によって翻訳され、妥当性と信頼性の検討を通して作成された。46項目、4下位尺度構造を採用しており、「全く感じない」から「非常に感じる」の6件法で測定され、得点の範囲は46～276点を示す。なお、高い得点が自己分化の高さを示す。4つの下位尺度については中島（2019）が、「一つ目の情緒的反応（Emotional Reactivity：ER）尺度は、感情が優勢となり知性が発揮されず、双方を適切に機能できなくなる情緒的反応の状態を防ぐ能力を測定している。二つ目のアイ・ポジション（I-Position：IP）尺度は、他者から分化した安易に流されることのない明確な自己感覚や信念を持つ能力を測定している。三つ目の情緒的遮断（Emotional Cut-off：EC）尺度は、親密になることによる情緒的な巻き込み・巻き込まれを恐れ、非建設的に関係を遮断する状態を防ぐ能力を測定している。最後に四つ目の他者との融合（Fusion with Others：FO）尺度は、自他の境界が曖昧で他者と融合してしまい、情緒的に巻き込み合う状態を防ぐ能力を測定している。このように、ER尺度とIP尺度が個人内の、EC尺度とFO尺度が個人間の機能を踏襲している」と説明している。

② IIP-64（鈴木・藤山，2011；Horowitz, et al, 2000）

対人的な問題の測定に用いられた。Horowitz, et al（2000）による原法を鈴木・藤山（2011）が翻訳し、妥当性と信頼性を検討したものである。64項目8下位尺度で、各下位尺度とも8項目で構成され、下位尺度の内訳は「横柄で支配的」「執念深く、自己中心的」「冷淡でよそよそしい」「引っ込み思案」「自己主張ができない」「周りに合わせすぎる」「自己犠牲的」「おせっかいで要求がましい」である。「まったくない」から「非常にある」の5件法によって測定され、1項目あたり0～4点で採点されるため、得点の範囲は総合得点が0～256点、各下位尺度が

0～32点を示す。なお、高い得点が対人関係でストレスを感じている高さを示す。これらの8下位尺度はWiggins（1979）やWiggins, Trapnell & Phillips（1988）の対人円環モデルに基づいて設定されており、Figure 1のような直行する「従属—支配」と「敵意—友好」の2軸に基づいてそれぞれ位置付けられている。

本研究では対人的な問題を測定する際に相手の特性も鑑みて検証をするため、回答する際に自身の父親、自身の母親、男性の友人、女性の友人のそれぞれいずれかとの関係を想定して回答するよう教示している。

倫理的配慮

調査を開始する事前説明として、①調査内容に関する概要、②調査協力は自由意志によるものであり、回答の辞退を認めること、③本調査に対する協力の是非や回答内容が所属大学での成績や評価に影響しないこと、④本調査は匿名で行われ、さらに統計学的処理を施すため、個人が特定されるようなかたちで結果を公表することはないことを伝え、実施した。

結果

以下に、記述統計量、DSI-RとIIP-64間の相関係数、対人的な問題を抱える相手別のDSI-RとIIP-64間の相関係数、相手別による相関係数の比較の順番で記載する。

記述統計量

DSI-RとIIP-64の記述統計量をTable 1に記す。

歪度について、折笠（2017）の基準を参照すると、IIP-64の「執念深く自己中心的」が.87、「冷淡でよそよそしい」が.76、「おせっかいで要求がましい」が.67で±.50～±1.0の範囲に入り、正の方向に「やや歪んでいる（moderately skewed）」ことがわかった。しかしDSI-RとIIP-64ともに概ね±.5を絶対値が下回り、ほぼ正規分布であると判断ができ、さらにやや正の方に分布が歪んでいる3下位尺度の分布も顕著な歪みではないため、パラメトリック検定を適用した。

Table 1 記述統計量

	<i>M</i>	<i>SD</i>	Skewness	Kurtosis	Range
DSI-R					
情緒的反応:ER	34.75	8.49	-.06	.01	11-66
アイ・ポジション:IP	38.48	8.08	.47	.61	11-66
情緒的遮断:EC	45.43	8.90	-.12	.06	12-72
他者との融合:FO	38.62	8.29	.19	.13	12-72
総合得点	157.29	24.51	.19	.05	46-276
IIP-64					
横柄で支配的	6.07	5.24	.19	.75	0-32
執念深く自己中心的	7.67	5.57	.87	.72	0-32
冷淡でよそよそしい	9.04	6.74	.76	-.01	0-32
引っ込み思案	11.75	7.40	.43	-.46	0-32
自己主張できない	13.09	7.31	.25	-.50	0-32
周りに合わせすぎる	10.73	6.16	.28	-.49	0-32
自己犠牲的	9.02	5.36	.42	-.27	0-32
おせっかいで要求がましい	7.79	5.25	.67	-.25	0-32
総合得点	75.17	36.77	.20	-.58	0-192

Table 2 相関係数 (N=321)

	IIP				
	横柄で 支配的	執念深く、 自己中心的	冷淡で よそよそしい	引っ込み 思案	自己主張が できない
DSI-R					
情緒的反応:ER	-.28**	-.36**	-.23**	-.29**	-.32**
アイ・ポジション:IP	n.s.	-.18**	-.15**	-.29**	-.40**
情緒的遮断:EC	-.31**	-.45**	-.50**	-.47**	-.33**
他者との融合:FO	n.s.	-.13*	n.s.	-.25**	-.38**
総合得点	-.26**	-.39**	-.34**	-.45**	-.49**
	IIP				
	周りに 合わせすぎる	自己犠牲的	おせっかいで 要求がましい	総合得点	
DSI-R					
情緒的反応:ER	-.32**	-.33**	-.36**	-.41**	
アイ・ポジション:IP	-.41**	-.22**	-.27**	-.34**	
情緒的遮断:EC	-.27**	-.24**	-.18**	-.47**	
他者との融合:FO	-.39**	-.33**	-.32**	-.33**	
総合得点	-.48**	-.38**	-.39**	-.54**	

** $p < .01$, * $p < .05$

DSI-R と IIP-64 間の相関係数

DSI-R と IIP-64 間の相関係数を Table 2 に記す。
全体的に、1%水準で有意な弱程度から中程度の

負の相関を示した。DSI-R の下位尺度および総合得点別で1%水準の有意な相関係数を見ると、ER が $r = -.41 \sim -.23$, IP が $r = -.41 \sim -.15$, EC が $r = -.50 \sim -.18$,

FO が $r=-.39 \sim -.13$, 総合得点が $r=-.54 \sim -.26$ を示した。

対人的な問題を抱える相手別の DSI-R と IIP-64 間の相関係数

IIP-64 を回答する際に想定する対人的な問題を抱える相手 (同性の親, 異性の親, 同性の友人, 異性の友人) 別の DSI-R と IIP-64 間の相関係数を Table 4 に記す。

全体的に, 1%水準で有意な弱程度から中程度の負の相関を示し, DSI-R の下位尺度および総合得点別で 1%水準の有意な相関係数を見ると, ER が $r=-.50 \sim -.24$ (同性親 $=-.34 \sim -.24$, 異性親 $=-.49 \sim -.34$, 同性友人 $=-.46 \sim -.24$, 異性友人 $=-.50 \sim -.24$), IP が $r=-.52 \sim -.23$ (同性親 $=-.34 \sim -.24$, 異性親 $=-.42 \sim -.23$, 同性友人 $=-.52 \sim -.29$, 異性友人 $=-.47 \sim -.23$), EC が $r=-.57 \sim -.22$ (同性親 $=-.57 \sim -.35$, 異性親 $=-.56 \sim -.22$, 同性友人 $=-.42 \sim -.25$, 異性友人 $=-.48 \sim -.24$), FO が $r=-.44 \sim -.22$ (同性親 $=-.41 \sim -.22$, 異性親 $=-.44 \sim -.25$, 同性友人 $=-.37 \sim -.27$, 異性友人 $=-.44 \sim -.23$), 総合得点が $r=-.62 \sim -.28$ (同性親 $=-.50 \sim -.28$, 異性親 $=-.62 \sim -.40$, 同性友人 $=-.52 \sim -.32$, 異性友人 $=-.48 \sim -.35$) を示した。

相手別による相関係数の比較

DSI-R と IIP-64 間における相手別に算出した相関係数の差を, IIP-64 の下位尺度別に山田 (1989) を参考に検証した。同性の親, 異性の親, 同性の友人, 異性の友人の 4 群があり, 計 6 つの組み合わせで, つまり計 6 回検定を行うために, FDR を調整するた

めの BH 法を用いて有意確立の調整を行った。相手別に相関係数を比較し, 有意な差が見られた箇所を Table 3 にまとめる。

まず ER については, IIP-64 の「引っ込み思案」において異性の親 ($r=-.39, p<.01$) の方が異性の友人 ($r=-.04, n.s.$) より有意に関連が強く ($Z=2.27, p=.02$), 同じく「引っ込み思案」において同性の友人 ($r=-.44, p<.01$) の方が異性の友人より有意に関連が強かった ($Z=2.56, p=.01$)。

次に IP については, IIP-64 の「横柄で支配的」において異性の親 ($r=-.26, p<.01$) の方が異性の友人 ($r=.15, n.s.$) より有意に関連が強かった ($Z=2.62, p=.01$)。

3 つ目に EC については特に有意な関連の差は見られなかった。

4 つ目に FO については, IIP-64 の「横柄で支配的」において同性の親 ($r=-.22, p<.05$) の方が異性の友人 ($r=.17, n.s.$) より有意に関連が強く ($Z=2.47, p=.01$), 同じく「横柄で支配的」において異性の親 ($r=-.32, p<.01$) の方が異性の友人より有意に関連が強かった ($Z=3.17, p=.00$)。また「執念深く, 自己中心的」において同性の親 ($r=-.20, n.s.$) の方が異性の友人 ($r=.21, n.s.$) より有意に関連が強く ($Z=2.55, p=.01$), 同じく「執念深く, 自己中心的」において異性の親 ($r=-.31, p<.01$) の方が異性の友人より有意に関連が強く ($Z=3.34, p=.00$), 同じく「執念深く, 自己中心的」において同性の友人 ($r=-.17, n.s.$) の方が異性の友人より有意に関連が強かった ($Z=2.30, p=.02$)。しかし, 比較した両相関係数がともに有意でないものもあり, 解釈に留意する必要がある。

Table 3 相手別の相関係数における有意差の検定結果まとめ

DSI-R	IIP-64	相手別に比較した有意な相関係数の差
ER	引っ込み思案	異性の親($r=-.39, p<.01$) > 異性の友人($r=-.04, n.s.$) 同性の友人($r=-.44, p<.01$) > 異性の友人($r=-.04, n.s.$)
IP	横柄で支配的	異性の親($r=-.26, p<.01$) > 異性の友人($r=.15, n.s.$)
FO	横柄で支配的	同性の親($r=-.22, p<.05$) > 異性の友人($r=.17, n.s.$) 異性の親($r=-.32, p<.01$) > 異性の友人($r=.17, n.s.$)
	執念深く、自己中心的	同性の親($r=-.20, n.s.$) > 異性の友人($r=.21, n.s.$) 異性の親($r=-.31, p<.01$) > 異性の友人($r=.21, n.s.$) 同性の友人($r=-.17, n.s.$) > 異性の友人($r=.21, n.s.$)
総合得点	横柄で支配的	異性の親($r=-.45, p<.01$) > 異性の友人($r=-.07, n.s.$)

注) N : 同性親=82, 異性親=87, 同性友人=77, 異性友人=75

Table 4 相手別の DSI-R と IIP-64 間の相関係数 (N=321)

		IIP							総合得点	
DSI-R	相手	横柄で	執念深く、	冷淡で	引込み思案	自己主張が	周りに	自己犠牲的	おせっかいで	総合得点
		支配的	自己中心的	よそよそしい	引っ込み思案	できない	合わせすぎる	要求がまし		
情緒的反応 ER	同性親	-.24*	-.33**	n.s.	-.25*	-.30**	-.26*	-.29**	-.29**	-.34**
	異性親	-.43**	-.42**	-.34**	-.39**	-.37**	-.44**	-.39**	-.37**	-.49**
	同性友人	n.s.	-.45**	-.34**	-.44**	-.36**	-.35**	-.24*	-.26*	-.46**
	異性友人	n.s.	-.24*	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	-.50**	-.32**
アイ・ポジション IP	同性親	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	-.32**	-.24*	n.s.	n.s.	n.s.
	異性親	-.26*	-.23*	n.s.	-.31**	-.38**	-.42**	-.31**	-.28**	-.38**
	同性友人	n.s.	n.s.	n.s.	-.30**	-.43**	-.52**	n.s.	-.29*	-.37**
	異性友人	n.s.	n.s.	-.23*	-.41**	-.47**	-.44**	n.s.	-.30**	-.39**
情緒的遮断 EC	同性親	-.35**	-.54**	-.57**	-.57**	-.40**	n.s.	n.s.	n.s.	-.49**
	異性親	-.28**	-.44**	-.56**	-.50**	-.43**	-.38**	-.22*	n.s.	-.49**
	同性友人	-.27*	-.40**	-.40**	-.42**	n.s.	-.25*	-.29*	-.26*	-.42**
	異性友人	-.32**	-.39**	-.41**	-.40**	-.28*	-.25*	-.25*	-.24*	-.48**
他者との融合 FO	同性親	-.22*	n.s.	n.s.	n.s.	-.40**	-.35**	-.40**	-.41**	-.35**
	異性親	-.32**	-.31**	-.25*	-.32**	-.33**	-.44**	-.41**	-.35**	-.43**
	同性友人	n.s.	n.s.	n.s.	-.27*	-.37**	-.36**	n.s.	n.s.	-.31**
	異性友人	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	-.44**	-.41**	-.25*	-.32**	-.23*
総合得点	同性親	-.32**	-.44**	-.28*	-.41**	-.50**	-.38**	-.38**	-.36**	-.49**
	異性親	-.45**	-.50**	-.47**	-.53**	-.53**	-.58**	-.45**	-.40**	-.62**
	同性友人	n.s.	-.40**	-.36**	-.48**	-.44**	-.49**	-.32**	-.33**	-.52**
	異性友人	n.s.	n.s.	n.s.	-.37**	-.48**	-.44**	-.35**	-.47**	-.48**

**p<.01, *p<.05

N: 同性親=82, 異性親=87, 同性友人=77, 異性友人=75

最後に、総合得点については、IIP-64の「横柄で支配的」において異性の友人 ($r=-.45, p<.01$)の方が異性の友人 ($r=-.07, n.s.$)より有意に関連が強かった ($Z=2.61, p=.01$)。

とりわけIIP-64の「横柄で支配的」において相手別で相関係数の有意な差が見られ、DSI-RのIP、FO、総合得点がそれに該当する。それに次いでIIP-64の「執念深く、自己中心的」と「引っ込み思案」が挙げられる。相手別では総じて異性の友人が他の3つの相手と比較して有意に関連が弱く出る傾向が見られた。

考察

今回の調査とその分析結果から、限定的ではあるが、本国でも自己分化と対人的な問題は負の関連にある可能性が示された。しかし一方で、異性の友人が相手だと、有意な関連を示さなくなる傾向も見られ、とりわけ情緒的な反応を調整する自己分化の側面については顕著だった。このような対異性の友人における自己分化と対人的な問題の関連と最も顕著な差を表したのが、対異性の親における自己分化と対人的な問題の関連である。その中でも横柄で支配的な対人的な問題において関連同士間で有意な差が見られ、対異性の親の場合は自己分化と対人的な問題の関連は強く見られるが、対異性の友人の場合は前述した通り、関連は弱く見られた。その中でも、横柄で支配的な対人的な問題と自己分化の関連は対異性の親と対異性の友人間の差が顕著にみられる結果となった。

対人関係のケアにおける自己分化

本研究では、DSI-RとIIP-64、各々の下位尺度間で概ね有意な負の相関係数が見られた。Skowron, Stanley, & Shapiro (2009)では1回目の測定と2回目の測定との間における相関係数を掲載しているため単純な比較はできないが、概ね有意な弱から中程度の負の相関(1%・5%水準)を示しており($r=-.18 \sim -.56$)、本調査結果の妥当性が確認できる。この結果により、健康な自己分化を有している人は対人的な問題を抱えにくい可能性があり、対人関係のケア

において自己分化を探求する意義があると言える。

異性の友人という対人関係の特殊性

自己分化のERとIIP-64の下位尺度の関連において、対人的な問題を抱える相手全体と対異性の友人を比較すると、後者の方が相関関係は弱く、相手全体の場合はIIP-64の総合得点を含めて9箇所中全て有意な負の相関係数が算出された。一方で、対異性の友人は5箇所で有意な相関がみられないことが分かった。このことにより対異性の友人においては、対人関係の問題に対して自己分化の情緒的な面の関連を積極的に主張することができなくなった。

IIP-64の円環モデルを参照すると、今回有意でない「横柄で支配的」「冷淡でよそよそしい」「引っ込み思案」「自己主張できない」「周りに合わせすぎる」は「敵意」寄りであることがわかる。つまり、たとえ情緒的な反応が強い人であったとしても対異性の友人には敵意的な態度をとるとは限らず、一見友好的な「自己犠牲的」「おせっかいで要求がましい」態度を、FOのような対人的距離感が融合する自己分化の場合は、それに加えて「自己主張ができない」「周りに合わせすぎる」態度をとるため、敵意的態度と比べると社会生活上で問題として浮上しづらい。そのため、本人の対人的な問題を扱う際、異性の友人との間のエピソードについては敵意的なエピソードが伺えず、物静かで控えめな印象を持ったとしても情緒的に問題がないとするのは早合点となる。後述する異性の親との関係とはその在り方をめぐって差があり、替わって敵意的な問題を抱えている可能性も想定しておく必要がある。

異性の親と異性の友人の比較からみる統合的アセスメント

対人的な問題を抱える相手別に算出されたDSI-RとIIP-64間の相関係数を比較したところ、ECを除いて対異性の親と対異性の友人間で有意な差が見られ、対異性の親の方が対異性の友人より有意に強くDSI-RとIIP-64が負の関連を示していることが分かった。IIP-64の中でもこのような有意差は「横柄で支配的」で多くIPとFO、総合得点で見られ、次いで「引っ込み思案」がERで、「執念深く、自己中

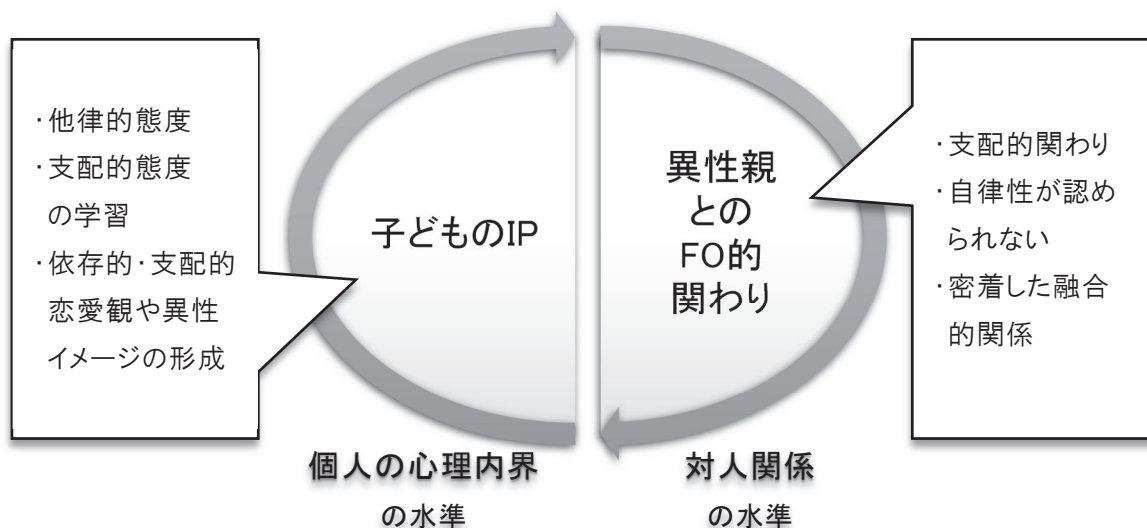


Figure 2 子どものIPと異性親とのFO的関わりの仮説的悪循環

心的」がFOで見られた。「引っ込み思案」以外は円環モデルで「支配」寄りに位置し、このような支配的性格は恋愛や結婚生活にて誘発されやすいストーキング、束縛、DVにおける問題の主たる要素である。これらカップル間の問題と自己分化との関連もBowen (1978)をはじめ繰り返し主張されてきた。しかし、より一般的な恋愛対象である異性のパートナーと同じく血縁以外の異性である異性の友人の場合、その関連が見いだされなかった。これは回答する際、教示文に「男性の”友人”」「女性の”友人”」という文言を見ることで恋人との線引きが意識化されたとも考えられ、一様に回答がパートナーに近寄るとは限らない。一方で異性の親の場合、被養育体験の中で理想の異性イメージとして同一視される(西平, 1990)ような側面もあることから、異性のパートナーとの関連が示唆され、回答が似通ると考えられる。その為、教示文に「自身のパートナー」を想定して回答するよう求めることが次の課題として挙げられる。

今回対異性の親と対異性の友人間で相関係数に有意な差があったIPは、自律性、つまり自己決定に基づいて健康な自我機能をもって行動ができ、しかし固執するのではなく適宜他者の視点を柔軟に受け入れられるような人格的特徴を意味する。このような成熟した自律性を構築するには自身の自律性が尊重される被養育環境も重要とされ、逆に自律性が削られる、つまり親から支配的な関わりを受け続ける

場合は他律的になり、親に精神的に依存していく構造が想定できる。このような支配的で柔軟性に欠く養育環境に対し、Olson, Sprenkle, & Russell (1979)は家族機能の円環モデルの中で適宜環境に合わせて家族を変容させていく適応性の必要さを主張している。その中では全く秩序がないのも問題ではあるが、周囲の影響や変化を受け入れながら柔軟に変容していく家族の在り方は健康度が高いとされている。この適応性と自己分化の正の関連は平木・岸・野末・安藤 (1998) や中島 (2019) で実証されている。この点に関する本研究の知見を、Figure 2のモデル図に記す。

個人のIPという、心理内界での自己分化(実際は対人的側面との境界上にあるとされるが、FOと比較して個人的な心理内界とする)が規定されると、それに基づいたコミュニケーションが家族との関わりで再現される。他律的で依存的な関わりが子から親へ発信されれば親はより支配的になり、相互に拘束しあう、対人的距離感が近い関係、つまりFO的な関係を形成する。

臨床への応用とその課題

このように、自己分化を用いることでIPという個人の心理内界と、FOという対人的要素が連続性をもって理解することが可能になり、双方をつなげたアセスメントとそれに基づいた統合的な臨床実践に結実できる。介入する際には単に個人の心理的な

問題として片づけるのではなく、それに基づく FO 的な関わり方の調整という、具体的行動かつ対人関係の水準に介入する発想が生まれる。まず物理的に接触頻度を下げる等、クライアントが希望し、かつ着手が可能な糸口から介入をはじめ、DSI-R を都度測定することで、現在クライアントのどの水準で自己分化に変化が表れているのかを追うことが出来る。Bowen (1978) や Griffin & Apostal (1993) では状態的な自己分化を継続して向上すると特性的な自己分化の向上に繋がると主張し検証している。中島 (2011) は、自己分化の中でも個人の心理内界より対人的側面の自己分化の方が環境からの影響を受けやすい、つまり状態的な側面の比重が高いとしており、先ほどの Bowen (1978) と Griffin & Apostal (1993) の知見につなげると、対人的な自己分化の向上を継続することで心理内界的な自己分化の向上が見込めることになる。これをさらに今回の知見に繋げると、FO 的な親子の関わりを調整して支配と拘束を緩和し、個人の IP を成熟させることになる。本研究は比較的健康であると仮定できる調査協力者が調査対象であるため、これらの仮説を臨床実践における実際のアセスメントを通して検証していくことが求められる。

対人的な問題を言及する際、このように自己分化の観点をその議論に用いると、Feldman (1979) や平木 (2010)、中釜 (2010) が提唱するように個人と対人の両側面に言及することが可能になる。問題にまつわる異なる水準の側面を視野に入れることは、人の生の現実に沿う臨床実践の実現であり、現代的な臨床心理学の在り方として求められる一つのあり方である（下山, 2000；下山, 2007）。この双方を単につなぎ合わせるのではなく、一定の理論的背景をもって連続性を説明したことは自己分化を扱った本研究の最大の意義である。

謝辞

本研究は東京大学教育学研究科に提出する予定である博士論文の一部を加筆・修正したものです。調査にご協力を頂いた調査協力者の皆様や質問紙の配布にご協力を頂いた皆様に深く感謝し申し上げます。

す。また、執筆にあたり貴重なご意見・ご指導をいただいた査読者の先生方、東京大学大学院教育学研究科の故中釜洋子先生、能智正博先生、お茶の水女子大学の石丸径一郎先生に深く感謝し申し上げます。

引用文献

- Bowen, M. (1978). *Family therapy in clinical practice*. New York: Jason Aronson.
- Bray, J. H., Williamson, D. S., & Malone, P. E. (1984). PERSONAL AUTHORITY IN THE FAMILY SYSTEM: DEVELOPMENT OF A QUESTIONNAIRE TO MEASURE PERSONAL AUTHORITY IN INTERGENERATIONAL FAMILY PROCESS. *Journal of Marital and Family Therapy*, 10 (2), 167 – 178.
- Feldman, L. B. (1979). Marital conflict and marital intimacy: An integrative psychodynamic-behavioral-systemic model. *Family Process*, 18 (1), 69–78.
- Griffin, J. M. & Apostal, R. A. (1993). The influence of relationship enhancement training on differentiation of self. *Journal of marital and family therapy*, 19 (3), 267-272.
- 平木典子 (2010). 臨床心理学をまなぶ4 統合的加入 東京大学出版会
- 平木典子・岸 敬子・野末武義・安藤由紀子 (1998). 自己分化インベントリー (Differentiation of Self Inventory) 開発の試み—多世代家族関係の理解のために— 研究助成論文集, 34, 144 – 151.
- 平木典子・野末武義 (2000). 特集 臨床現場における心理療法の工夫 家族臨床における心理療法の工夫—個人心理療法と家族療法の統合— 精神療法, 26 (4), 12–21.
- Horowitz, L. M., Alden, L. E., Wiggins, J. S., & Pincus, A. L. (2000). *Inventory of interpersonal problems: Manual and Sampler Set. Forms: IIP-64 and IIP-32*. Mind Garden.
- 金沢吉展・岩壁 茂 (2006). 心理臨床家としての職業的発達に関する調査から— (1) 臨床家としての自己評価に与える要因について— 日本心理臨床学会大会論文集, 234
- Kerr, M. E. & Bowen, M. (1988). *FAMILY EVALUATION—An Approach Based on Bowen Theory—*. W. W. Norton & Company., Inc. 藤縄昭・福山和女 (監訳) 2001 家族評価 - ボーエンによる家族探求の旅 - 金剛出版
- 中釜洋子 (2010). 個人療法と家族療法をつなぐ—関係系志向の実践的統合— 東京大学出版会

- 中島隆太郎 (2011). 日本語版 Differentiation of Self Inventory-Revised 作成の試み—ER 尺度および IP 尺度の妥当性の検証— 東北大学大学院教育学研究科臨床心理相談室紀要, 9, 98-111.
- 中島隆太郎 (2019). 日本語版自己分化測定尺度 (DSI-R) 作成の試み—対人関係の統合的測定の試み— 家族心理学研究, 33 (1), 13-26.
- 西平直喜 (1990). 成人になること—生育史心理学から— 東京大学出版会
- Norcross, J. C. (2005). *Psychotherapy Relationships that Work (2nd Ed)*. New York, Oxford University Press.
- Olson, D. H., Sprenkle, D. H. & Russell, C. S. (1979). Circumplex Model of Marital and Family System 1: Cohesion and Adaptability Dimensions, Family Types and Clinical Application. *Family Process*, 18, 3-28.
- 折笠秀樹 (2017). COLUMN 正規性の確認方法について 薬理と治療, 45 (12), 1993—1995.
- Peleg-Popko, O. (2002). Bowen Theory: A Study of Differentiation of Self, Social Anxiety, and Physiological Symptoms. *Contemporary Family Therapy*, 24 (2), 355—369.
- 下山晴彦 (2000). 臨床現場における心理療法の工夫と統合的視点の重要性 精神療法, 26 (4), 3—11.
- 下山晴彦 (2007). 精神療法・心理療法の統合の意義 精神療法, 33 (1), 3-5.
- Skowron, E. A. (2000). The Role of Differentiation of Self in Marital Adjustment. *Journal of Counseling Psychology*, 47 (2), 229—237.
- Skowron, E. A. (2005). Parent Differentiation of Self and Child Competence in Low-Income Urban Family. *Journal of Counseling Psychology*, 52 (3), 337—346.
- Skowron, E. A., & Friedlander, M. L. (1998). The Differentiation of Self Inventory: Development and Initial Validation. *Journal of Counseling Psychology*, 45 (3), 235—246.
- Skowron, E. A., Stanley, K. L. & Shapiro, M. D. (2009). A Longitudinal Perspective on Differentiation of Self, Interpersonal and Psychological Well-Being in Young Adulthood. *Contemporary Family Therapy*, 31, 3—18.
- Skowron, E. A., & Schmitt, T. A. (2003). Assessing Interpersonal Fusion: Reliability and Validity of a New DSI Fusion with Others Subscale. *Journal of Marital and Family Therapy*, 29 (2), 209-222.
- 鈴木菜実子・藤山直樹 (2011). IIP-64 (対人関係診断目録) 日本語版における信頼性と妥当性の検討 上智大学心理学年報, 36, 61—69.
- Wachtel, P. L. (1997). *PSYCHOANALYSIS, BEHAVIOR THERAPY, AND THE RELATIONAL WORLD*. American Psychological Association.
(ワクテル, P. L. 杉原保貴 (訳) (2002). 心理療法のお統合を求めて—精神分析・行動療法・家族療法— 金剛出版)
- Wiggins, J. S. (1979). A Psychological taxonomy of trait-descriptive terms: the interpersonal domain. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 513-527.
- Wiggins, J. S., Trapnell, P. & Phillips, N. (1988). Psychometric and Geometric Characteristics of the Revised Interpersonal Adjective Scale (IAS-R). *Multivariate Behavioral Research*, 23, 517-530.
- 山田文康 (1989). II -37 母相関係数の差の検定 池田 央 (編) 統計ガイドブック 新曜社, pp. 91.

(2019. 7. 5 受稿) (2020. 1. 9 受理)

(ホームページ掲載 2020年2月)